Tattvasamīkṣā 考

金沢　篤

mīyamānaparityāgo bādhake nāsati sphuṭe/
dṛṣṭāt kāryopapattau ca nādṛṣṭaparikalpanā// (1)

はじめに

表記の『タットヴァサミークシャー』(Tattvasamīksā:TS)とは、シャンカラ(Śaṅkara)の『ブラフマスートラ注解』(BrahmasūtraŚāṅkarabhāṣya:BrSuSBh)に対する重要な注釈『バーマティー』(Bhāmatī:BM)の著者として知られるヴァーチャスパティミシュラ(Vācaspatimiśra:Vācaspati)の未回収の著作である。Vācaspatiの人と思想の解明をひとつの課題として多年種々文献にかかずらってきた筆者にとっては、むろん気になる著作ではあったが、未発見では如何せん、手をこまぬいてきたというのが偽らざるところである。したがって、マンダナミシュラ(Maṇḍanamiśra: Maṇḍana)の『ブラフマシッディ』(Brahmasiddhi:BrSi)に対する注釈書として広く知られるこのTSに関して、今日語り得ることは驚くほどに少なく、断簡にせよ、その写本が発見される日を密かに夢見てきたと言ってもよい立場にあるわけだが、つい先頃、インド思想史を塗り替えんばかりの意欲的な研究の推進者として有名なS.Sankaranarayanan(2)(SN)によって、"Tattvasamikṣā of Vācaspatimiśra:A Fresh View"(3)(SNTS)と題された論文が発表された。TSが真っ向から論じられること自体前例を知らず、魅惑的な「新見解」との副題が付されていたこともあり、遂に何か重要な新資料でも発見されたか、との期待と共に直ちに通読した。微妙な問題を含んでいることもあって相当に難儀したが、何とか著者の新見解を咀嚼できたように思われる。また、色々散逸・錯綜しているかのTS関連資料を整理する絶好の機会とも考えられ、小論を起こしてSNの所説を検証し、少しく私見をまとめて、今後のさらなる研究に備えたいと念願した。

Ⅰ. Vācaspatiの著作とTS関連基礎資料

Maṇḍana及びBrSi等の諸著作、またVācaspati及びその数ある著作に関して

は、既に盛んに論じられ、さらなる研究も鋭意継続されているので、徐々にその全貌が解明されつつある、とは言える[4]。だが、Maṇḍana研究の側からも、またVācaspati研究の側からもTSに関しては、これまで組織的にあるいは網羅的に論究されたことがなかった。それを縦横に論ずるに値する直接的な資料が乏しかったことによると考えられるが、残念ながら、今回も、SNによって新資料が提出されたということではなかった。その独創的なアイデアに啓発されはしたものの、これまでの研究成果を必ずしも十分に踏まえていない不経済論文であり、その論述にも看過し得ない粗相が時に見受けられ、随分と不満が残ったことを、予め告白しておくべきであろう。

さて、ここでの手続きとして、既に周知のことではあるが、Vācaspatiに以下の著作のあることを確認することから始めたい[5]。

①『ニヤーヤカニカー』(Nyāyakaṇikā:NK)
②『タットヴァサミークシャー』(TS)
③『タットヴァビンドゥ』(Tattvabindu:TB)
④『タートパリヤティーカー』(Nyāyavārttikatātparyaṭikā:NVTT)
　『ニヤーヤ・スートラ・ウッダーラ』(Nyāyasūtroddhāra)?
　『ニヤーヤ・スーチーニバンダ』(Nyāyasūcinibandha)?
⑤『タットヴァカウムディー』(Tattvakaumudi:TK)
⑥『タットヴァヴァイシャーラディー』(Tattvavaiśāradi:TV)
⑦『バーマティー』(BM)

①から⑦の7著作はVācaspatiの真作で、③TSを除いては、何度も出版されている。いずれも今日容易に参照・通覧が可能な著作である。?を付したニヤーヤ学派の2著作は、やはり公刊もされている小著である。共にコロホンに著作年代と思しき年号を持つことから、Vācaspatiの年代論にあっては従来重要な役割を果たしてきたが、当のVācaspatiの真作か偽作かに関しては未だ意見の分かれるところがあり、TSに主眼をおいた本稿では考慮外におく[6]。①と③がミーマーンサー学派(バーッタ派)、②がヴェーダーンタ学派、④はニヤーヤ学派、⑤はサーンキャ学派、⑥はヨーガ学派、そして⑦はヴェーダーンタ学派の著作と便宜上分類されることがある。こうしたヴァライエティに富む著作を遺したVācaspatiは、ミティラー出身、9世紀、ないし10世紀ころに活躍した思想家と

見なされている。思想史的にも重要なその7著作の成立順も、自著における自著言及・引用などをチェックするだけで、かなり明確にし得るが、今日なお活用参照される研究文献にも、誤解・誤記が散見する(7)。後出の資料に明かな通り、この著作リストは、⑦BMのコロホンの記述に則ったもので、その著作順までも盛り込んだものと推定されているが、現時点では、それに明確に齟齬する事例も報告されてはいない。

そこで、この未回収のTSであるが、従来それに関して確定的に言い得たことを改めてまとめてみると、以下のようになる。TSは、

（イ）回収されていないものの、BMなどの著者たるVācaspatiの真作である。
（ロ）時に『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』と呼ばれる。
（ハ）MaṇḍanaのBrSiに対する注釈書である。（ヴェーダーンタの著作？）
（ニ）NVTTやTVやBMに先行する。

（イ）は、BM以外の自著の中にも、一度ならずその名前が言及されていることから、確実であろう。（ロ）は、後出(ii)(iii)(iv)(v)(ix)の用例で明かである。（ハ）を裏付けるのは、VācaspatiのBMに対するアマラーナンダ(Amalānanda)の注釈書『ヴェーダーンタカルパタル』(Vedāntakalpataru:VK)の記述(viii)があるばかりである。（ニ）は、Vācaspatiの著作のうち、NVTTとTVとBMの3著作に、TSについての言及のあることによる。またTSに言及しないTKにはNVTTへの言及がある(8)から、TSは、NVTTやTKやTVやBMに先行する、と言い替えてもよい。NKやTBにはTSに対する言及はない。さらに、NVTTにはTBへの言及があり(9)、TBにはNKへの言及がある(10)ことに触れておけば、Vācaspatiの著作相互の関係に関する基礎資料を尽くしたものとなろう(11)。

次に、TS関連基礎資料と言うべきものを拙訳を付して以下に示したい。筆者の知る限り、歴史的サンスクリット文献の中にTSの名前が出てくるのは、この9例のみである。うちVācaspati自身によるものが3著作7例(NVTT中に3例、TV中に1例、BM中に3例)、Vācaspatiのものを除くと、わずかに2著作2例(viii)(ix)しか知られていない。共にVācaspatiとも関わりの深いヴェーダーンタの学匠によるものであることは注目に値しよう。即ち、先にも触れたBMに対するAmalānandaによる注釈VKと、アーナンダボーダ(Ānandabodha)の『プラマーナマーラー』(Pramāṅamālā: PM)の用例である。二人共に13世紀ころの思

想家とされるが、先述した通り、前者は、TSがMaṇḍanaのBrSiの注釈書との貴重な情報を与えるという点で、また後者はTSよりの直接の引用(と思しきもの)が唯一見いだされるという点で、重要であろう。

NVTT:

☆(i)diṅmātram atra darśitam prapañcas tattvasamikṣāyām asmābhiḥ kṛta ity uparamyate /(NVTT,p.91,ll.3-4)[ad NSu I-1-2]

(1)ここでは、方隅のみ示された。詳論は、『タットヴァサミークシャー』においてわたしたちによってなされたので、これまでとする。

(ii)vipañcitaṃ caitad asmābhir brahmatattvasamikṣānyāyakaṇikābhyām ity uparamyate /(NVTT,p.561,ll.13-14)[ad NSu III-2-14]

(2)また、これは、わたしたちによって、『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』と『ニヤーヤカニカー』において詳しく論じられているので、これまでとする。

(iii)vipañcitaṃ caitad asmābhir brahmatattvaparikṣāyām[12]/(NVTT, p. 614, ll.15-16)[ad NSu IV-2-40]

(3)また、これは、わたしたちによって、『ブラフマ・タットヴァパリ[サミ]ークシャー』において詳しく論じられた。

TV:

(iv)pratyakṣānusārata eva sāmagryabhedaḥ pārokṣyāpārokṣyadharmāvirodhaś copapādito nyāyakaṇikāyām / akṣaṇikasya cārthakriyā nyāyakaṇikā-brahmatattvasamikṣābhyām upapāditeti sarvam avadātam //(TV,p.39,ll.13-16)[ad YSu I-32]

(4)直接知覚(pratyakṣa)に適合することに基づいてのみ、原因集合(sāmagrī)の無区別、及び不可視・可視の諸性質の無矛盾が成立すること、は、『ニヤーヤカ

ニカー』において説明された。また刹那的ならざるもの(akṣaṇika)に、効果的作用性(arthakriyā)のあること、は、『ニヤーヤカニカー』と『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』において説明された。したがって、一切が明白となった。

BM:
☆(v)tat bodhakatvena svataḥprāmāṇyaṃ nāvyabhicāreṇeti vyutpādayadbhir asmābhiḥ parihṛtaṃ nyāyakaṇikāyām iti neha pratanyate/diṅmātraṃ cāsya smṛtipramoṣabhaṅgasyoktam/vistaras tu brahmatattvasamikṣāyām avagantavya iti, ...(BM,p.30,ll.8-10)[ad BrSu I-1-1]

(5)それは、[それが]覚知せしむるものであることによって、自立的に認識手段たること(svataḥprāmāṇya)があるのであって、逸脱しないこと(avyabhicāra)によってではない、と知らしめんとするわたしたちによって、『ニヤーヤカニカー』において論破されたのであるから、ここでは論じない。また「想起の欠損[説]」(smṛtipramoṣa)に対する論駁(bhaṇga)については、方隅のみ述べられたのであるが、詳細は『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』に就いて理解されたい。

☆(vi)na ca cintāsākṣātkārayor vidhir iti tattvasamikṣāyām asmābhir upapāditam/vistareṇa cāyam arthas tatraiva prapañcitaḥ/(BM,p.713,l.32)
[ad BrSu III-2-21]

(6)また、瞑想(cintā)や直覚(sākṣātkāra)に対しての儀軌(vidhi)がある、ということはない、と『タットヴァサミークシャー』において、わたしたちによって説明された。そして、この意味は、まさしくそこで、詳細に論じられたのである。

☆(vii)yan nyāyakaṇikātattvasamikṣātattvabindubhiḥ/
yan nyāyasāṃkhyayogānāṃ vedāntānāṃ nibandhanaiḥ//3//
samacaiṣaṃ mahat puṇyaṃ tat phalaṃ puṣkalaṃ mayā/
samarpitam athaitena priyatāṃ parameśvaraḥ//4//(BM,p.1020,ll.19-22)

[BM's colophon]

(7)『ニヤーヤカニカー』『タットヴァサミークシャー』『タットヴァビンドゥ』によって、ニヤーヤ、サーンキャ、ヨーガの、[また]諸々のヴェーダーンタ(ウパニシャッド)に関する諸著作によって、わたしは大いなる功徳を積んだが、その大いなる果実をわたしは奉納する。それ故に、最高自在神は、これを嘉納されたし[13]。

VK(of Amalānanda):
☆(viii)nyāyakaṇikā vidhivivekaṭikā／tattvasamikṣā brahmasiddhivyākhyā/tattvabindur bhāṭṭamatāśrayaṃ svakṛtaṃ prakaraṇam/nyāyasya nibandho nyāyavārtikatātparyaṭikā/tattvakaumudī sāṃkhyanibandhaḥ/yoganibandhanaṃ pātañjalabhāṣyaṭikā tattvaśāradī/vedāntānāṃ sarvopaniṣadāṃ nibandhanam iyam eva bhāmatī /(VK,p.1021,ll.9-11)[ad BM's colophon]

(8)『ニヤーヤカニカー』とは、『ヴィディヴィヴェーカ』の解明である。『タットヴァサミークシャー』とは、『ブラフマシッディ』の注解である。『タットヴァビンドゥ』とは、バーッタ派に依って自らモノした論書である。ニヤーヤの著作とは、『ニヤーヤヴァールティカタートパリヤティーカー』のことである。『タットヴァカウムディー』が、サーンキャの著作である。ヨーガの著作とは、パタンジャリの[『ヨーガスートラの]注解』の解明たる『タットヴァ[ヴァイ]シャーラディー』のことである。諸々のヴェーダーンタ、すなわち一切のウパニシャドに関する著作とは、他ならぬこの『バーマティー』のことである。

PM(of Ānandabodha Yati):
☆(ix)ata evoktam ācāryavācaspavatinā brahmatattvasamikṣāyām 'sadasadubhayānubhayādiprakārair anirvacanīyatvam eva hy avidyānām avidyātvam' iti/(PM,p.10,ll.28-29)

(9)この故にこそ、ヴァーチャスパ[ヴァ]ティ先生により、『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』に於いて、「なぜなら、無明(avidyā)の無明性(avidyātva)は、<有>(sat)、<非有>(asat)、また<有にして非有>(ubhaya)、<有にし

て非有・ならざる＞(anubhaya)等と言説し得ないこと(anirvacaniyatva)に他ならない」と、述べられたのである。

Ⅱ. S.Sankaranarayananの新見解

SNは、従来の研究で既に使い古されたかのBM末尾コロホン中の前節(vi)を引くことから、その論を開始する。以下のSNの記述は、筆者には新鮮な驚きであった。

"In the Indian tradition Vācaspati is perhaps the first writer to give us a complete list of his works, that too in a correct chronological order. Now the manner in which these works are clubbed together by compound expression and common terminology in the above verses seems to indicate that the academic career of Vācaspati consisted roughly of three phases." (SNTS,p.117,ll.18-24)

BMのコロホンで、Vācaspatiは自分の全著作リストを掲げているらしい、とは承知しつつも、それがインドの伝統の中で稀有なことであることは、筆者には確かとは自覚されていなかった。もしかしたら、実際それはとてつもなく稀有なことであったのかも知れない、と思われたのである。また、そのリストの順番がその著作順である可能性が高い、とは承知しつつも、サンスクリット詩文におけるその表現の仕方の3様が、もしかしたら、Vācaspatiの経歴の3段階を反映させたものになっている、という指摘も、筆者にはまったく新鮮なものであった。

①『ニヤーヤカニカー』『タットヴァサミークシャー』『タットヴァビンドゥ』
②ニヤーヤ・サーンキャ・ヨーガの[著作]
③ヴェーダーンタに関する著作(14)

第1段は、具体的な著作名が並列複合語の形で列挙される。第2段は、3つの学派名が並列複合語の形で列挙される。そして最後の第3段が、著作の対象名(学派の依拠する聖典名)で表現されている。SNのその "three phases" で、筆者には、遙かに遠い過去、9世紀ないし10世紀に在世したであろう哲人Vācaspatiが如何なる人生を歩み、いかにして自らの思想を形成していったかを、まざまざ

と見てとることが出来るように思われたのである。そしてSNは、その第1段階をVācaspatiのミーマーンサー期と捕らえ、第2段階でニヤーヤ、サーンキャ、ヨーガと進めて、最後の第3段階で、ヴェーダーンタ哲学に畢竟したと考え、次のように言うのである。

"In listing his own works in chronological order, Vācaspati mentions *Tattvasamīkṣā* in Dvandva compound marked on both sides by his two well-known Bhāṭṭa Mīmāṃsā works, *Nyāyakaṇikā* and *Tattvabindu*(*nyāya-kaṇikā-tattvasamīkṣā-tattvabindubhiḥ*). It is thus logical to identify *Tattvasamīkṣā* also as a Mīmāṃsā work."(SNTS,p.119,l.28-p.120,l.45)

また、SNがこの部分の末尾に註5として、「有名な格言」(famous maxim)たる "tanmadhyapatitaḥ tadgrahaṇena gṛhyate.'"を引いている点は注意すべきかと考える。耳馴れぬこの格言を、SNがそれに付した英訳 "the one figuring in the midst of two(or more) entities is to be taken as a member of the same class to which the other entities belong.[15]"を頼りに訳すならば、「2個ないしそれ以上の支分の間に置かれた別の支分は、その同類と見なされるべきである」とでもなろうか。TSをミーマーンサーの著作と見なすことが「論理的」(logical)、と主張する一つの根拠を示したようだが、筆者には、その「有名な格言」の有効性は甚だ疑問である。並列複合語に関するこの文法規則[16]によれば、問題の並列複合語を構成している第1支分のNKも第3支分のTBもミーマーンサー派の著作である、したがって、第2支分のTSもミーマーンサー派の著作と考えるのが合理的である、と主張したいようなのである。が、いかがなものだろうか？　3つの[同類である]著作名からなる並列複合語であり、そのリスト順を著作順と考える者にとっては、まさしく蛇足と言うべき理屈であろう。

第1段階に属するNKはMaṇḍanaの『ヴィディヴィヴェーカ』(Vidhiviveka: VV)に対する注釈書である。TBはミーマーンサー学派のクマーリラ(Kumārila-bhaṭṭa: Kumārila)の言語学説を宣揚する独立の著作であるが、Maṇḍanaの『スポータシッディ』(Sphoṭasiddhi:SS)の影響を強く帯びている。また、TSの未発見であることを嘆く声はあっても、それがMaṇḍanaのBrSiに対する注釈書であることに疑義を唱えた者を、筆者は知らない。独立の著作であるBrSiは、

「ブラフマンの証明」との書名からして、ヴェーダーンタ学派の著作と分類されるのも無理からぬところである。したがって、それに対する注釈書たるTSも、当然のようにヴェーダーンタ学派の著作と分類すべきである。だが、SNにとって、最後にBMを著すことになるVācaspatiの初期のミーマーンサーの2著作の間にヴェーダーンタの著作がポツンと置かれている事態は、到底許し難いものと思われたのである。しかもVācaspatiが、最後の著作BMに対して「ヴェーダーンタ」という語を敢えて用いたことは、その他の著作が「非ヴェーダーンタ」であることの証である、と解し得る "Thus by separating his Vedānta work from the*Tattvasamīkṣā*, Vācaspati certainly expects us not to mistake it for a Vedānta treatise, that is, for a commentary on the *Brahmasiddhi*.(17)" とのSNの指摘は、真に衝撃的である。従来説に甘ずる者には一つの試金石となろう。

SNの「TSはBrSiの注釈書でもヴェーダーンタの著作でもなく、ミーマーンサーの著作である」との新しい仮説に対する、筆者などには「明白」(sphuṭa)と思われる「無効要因」(bādhaka)は2点、すなわちTSに関してある『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』という呼称の存在と、TSはBrSiの注釈書であるとの証言の存在である。SNは如何にそれを克服するだろうか。

以下には、SNの、具体的な作業を見てみよう。先ずSNは、TKが、時に『サーンキャ・タットヴァカウムディー』と呼ばれ、TVが、時に『ヨーガ・タットヴァヴァイシャーラディー』と呼ばれることがあると同様、TSが、時に『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』と呼ばれることがある点を改めて確認し、それが、TSがBrSiの注釈である[という伝承のある]ことと、関係している点を仄めかすのである。SNは、さらにTSは、Vācaspatiの没後、かなり早い時期に失われて、「12、13世紀の学匠たちにはもはや参照不可能であった」という大胆な仮説を追加し、以下のように明言して、具体的な作業に突き進んで行くのである。

<1>TSと誤謬論：

"However there are at least <u>six references</u> (as far as the present writer knows) to shed light on its generarl nature. Vācaspati himself speaks, in <u>four contents</u>, of *Tattvasamīkṣā* as his own treatise. Three of them occur in the *Bhamatī* itself and one in *Nyāyavārttikatātparyaṭīkā*. Besides

Vācaspati, at least two other authors are known to refer to the work. One of them is Ānandabodha Yati (*c*.12th century) whose works, *Nyāyamakaranda, Nyāyadīpāvali* and *Pramāṇamālā* well-known savant Citsukhācārya. (c.A.D. 1220). The other Amalānanda (c.A.D. 1250), the reputed author of *Kalpataru*, the commentary on the *Bhāmatī*." (SNTS,p.119,ll.13-26)

ここに明かな通り、SNは、前節に掲げた9例ではなしに、自らの知れる6例(前節基礎資料では☆印を付した)に基づいて展開しようというのである。前節でも見たVācaspatiの著作は、その数もさほどでなく、当のTSを除けば、今日いずれも簡単に参照可能である。また、そのいずれも、ひどく大部のもの、でもないわけで、TSへの言及のありなしは、容易にチェック出来るはずである。にもかかわらず、その手続きを怠っている。前代未聞の「新見解」を提出しようとするのであるから、さらに周到なアプローチを期すべきであったろう。

SNは、前節(i)のNVTTの用例を問題にする。Vācaspatiが種々の誤謬説(khyātivāda)を検討する箇所に現れるものである。当時流通していた5つの誤謬説を論評し、ヴェーダーンタ派の誤謬説たるanirvacanīyakhyāti説などを退けて、viparitakhyāti (anyathākhyāti)説を宣揚しているのである。が、それはKumārilaの誤謬説であり、そこで引き合いに出される自著TSも明らかにバーッタ派の著作である筈、というのである。だが、そのように簡単に割り切っていいものだろうか？ヴェーダーンタ派の誤謬説の展開上、重要な役割を担った筈のMaṇḍanaの誤謬説自体の変遷なども極めて微妙な問題を含んでおり、その思想的展開と併せて、今なお議論すべき余地がある、というのが実情である(18)。現に、SN自身、前節(v)のBMにおけるVācaspatiの用例を問題とし、そこでのVācaspatiは、ヴェーダーンタの誤謬説であるanirvacanīyakhyātiを宣揚する中で、NKやTSに言及すると認めている。そして、そこでのVācaspatiの議論の主眼はakhyāti説の論破であり、また、anirvacanīyakhyāti説は実効上anyathākhyāti(ないし、viparitakhyāti)説と齟齬しないので、TSを召喚することには、支障なしとしているのである。その不整合を棚上げした形で、SNは、その(v)の用例に関しては、(viii)をもたらす注釈者Amalānandaが、VKのその箇所では、VācaspatiのNKにおける議論に関しては紹介している一方、TSでの詳論を紹介していない点に読者の関心を向けようとする。そして、このことは、Amalānandaには、VācaspatiのTSが既に参照不能であった事実を物語っているのではないか、という

重要な指摘を行うのである。

次いで、SNは、前節(ix)の用例、即ち今日唯一回収されているTSの一節、TSよりの引用を含むĀnandabodhaの記述を検討する。Ānandabodhaは、自らの著作PM中、種々誤謬説を論評し、anirvacaniyakhyāti説を宣揚する際に、VācaspatiのTSを援引するのである。SNは、次のように記している。

"In that context he cites approvingly from the *Tattvasamīkṣā in* order to show Vācaspati's concurrence with the theory that the erroneousness of the error consists in cognizing a thing that cannot be asserted either as existent or as non-existent or as both existent and nonexistent.

ata evoktam ācāryavācaspatinā tattvasamīkṣāyām 'sadasadubhayādiprakārair anirvacanīyatvameva hyavidyānāmavidyātvam' iti /
(*Pramāṇamālā,* p. 10. The printed text however reads *brahmatattvasamīkṣāyām....*)" (SNTS,p.123,ll.9-19)

SNは、そこに自ら記しているように、自らが依拠しているPMの刊本の記載、"brahmatattvasamīkṣā"を "tattvasamīkṣā"と改めて引用している。なぜかその根拠を明示していないが、そのコメントの書きぶりは、その刊本が依拠した写本には、実際には "brahma-"はない、と言わんばかりである。さらにSNは、TSよりの引用文と思われる "sadasadubhayānubhayādiprakārair"を、"sadasadubhayādiprakārair" と誤記している。したがって、その英訳の方も原文に対しては不備あるものとなっている(19)。

SNは、Ānandabodhaが、ヴェーダーンタの誤謬説anirvacaniyakhyāti説を宣揚する際の教証として、なぜVācaspati の有名なBMを用いずに敢えてTSを用いたかという点に読者の注意を向ける。前記の通り、SNは、TSをミーマーンサーの著作と考える。また、それはMaṇḍanaのBrSiに対する注釈でさえないと考えるのである。TSはミーマーンサーの著作であるから、そこに展開された誤謬説は、ヴェーダーンタのanirvacaniyakhyāti説ではあり得ず、せいぜいがviparitakhyāti説であろう。にもかかわらず、Ānandabodhaは、anirvacaniyakhyāti説に対する教証に、BMではなしに、TSを引き合いに出した。なぜか？ SNは次のように言う。

"In view of all this, it should appear that most probably Ānandabodha (of the 12th century) too, like Amalānanda (of the next century) could not himself see the work, because it was lost even earlier; and what he records represents only a tradition about the work." (SNTS,p.124,ll.10-15)

VācaspatiのTSに言及していることが明白であるAmalānandaとĀnandabodhaの両者共、実際にはTSを実見することがなかった、という大胆な仮説を明確に提示しているのである。TSよりの引用と明らかに見なし得る条文を、SNは、TSをめぐる「単なる伝承」の所産と見なす。TSの実物は、Vācaspati没後のかなり早い時期に失われてしまい、AmalānandaもĀnandabodhaも、誤謬説を扱うミーマーンサーの著作TSに関して形成されていた奇妙な「伝承」の中で、あるいはTSがBrSiの注釈書である、という誤った「伝承」の中で、振る舞っている、と言うのである。さらに、SNは次のように言う。

"Further, the fact that Ānandabodha quotes from *Tattvasamīkṣā* and not from the *Bhāmatī* perhaps reflects the author's thought:'No doubt the *Bhāmatī*, an Advaita work, upholds the *anirvacanīya-khyāti*, and everyone knows it. Hence there is no special gain in citing from it; so let me (i.e. Ānandabodha) show that even the *Tattvasamīkṣā*, a Mīmāṃsā work, endorses the theory (of course in the context of discussing that theory).'" (SNTS,p.124,ll.18-27)

ただし、このあたりのSNの記述は、相当に屈折したものになっており、ともすれば混乱を露呈したものと言い得るかも知れない。Ānandabodhaは、ミーマーンサー学派の、誤謬説に関する著作TSをそれと知って、敢えてその教証とした。ミーマーンサーの著作であるTS でさえ、anirvacanīyakhyāti説を支持するものである、と。これに続けて、SNは、さらに以下のように言葉を重ねている。

"If this surmise is correct, then we may have to conclude that the tradition of *Tattvasamīkṣā*= *Brahmasiddhivyākhyā* identification became popular around Ānandabodha's time." (SNTS,p.124,ll.27-30)

要するに、SNは、この貴重な(ix)の用例によって、誤謬説に関する、Vācaspatiによる、BrSiの注釈などではないミーマーンサーの著作たるTSが、12、13世紀には、既に失われていた、と主張しようとしているのである。

単なるTSではなく、時にBrSiに対する注釈書、あるいはブラフマンの哲学を明確にするヴェーダーンタ学派の著作であることの証としての「ブラフマン」(brahman)を冠して『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』と呼ばれることも、そうした事情に関わる、いわばちょっとした<誤解・思いこみ>、ないし<スクライヴァル・エラー、誤記>によるものである、とするのである。本来はむしろその著作の主題たる「誤謬：ブフラマ」(bhrama)を冠しての『ブフラマ・タットヴァサミークシャー』であった、と推定するのであるが、当然ながら、その種の誤解、誤記の例は、歴史上、ごく頻繁に見られると補足することを、SNは忘れていない(20)。

以上によって、SNによるTSに関する「新見解」に対する明白な障碍と思われた前記の2点が、乗り越えられたことになる、らしい。そして、SNは、BrSiの注釈ではない、ミーマーンサーの「誤謬論」に関する著作たるTSに関して、さらに議論を展開させて行く。

<2>TSと儀軌論：

SNの作業は、第Ⅰ節に掲げた諸資料のうちの、自ら未使用の最後の用例、前節(vi)のBMのものに向かう。SNは、BM中の(vi)によって、TSという著作が、そのうちに「ブラフマン」を巡る「儀軌」(vidhi)論を含んでいたことを認め、それは現在に伝わるVācaspatiの別のミーマーンサーの著作NKの場合と同様であるとして、以下のように記している。

"It is not improbable that *Tattvasamīkṣā* was also fashoned more or less after the same model — that is, its earlier part constituted *Bhramatattvasamīkṣā* containing critical analyses of the nature of erroneous cognition and also of the various theories centering on the same topic; and its later part was *Brahmatattvasamīkṣā* devoted to the topics of the Veda(*brahman*, the source of true cognition) particularly the corepart of it, namely *vidhi*, *mantra* etc." (SNTS,p.133,ll.17-25)

"This hypothesis may better explain why *Tattvasamīkṣā* is at times referred to as *Brahmatattvasamīkṣā* without considering the dis[t]inction between the first and the second part of the work."(SNTS,p.133,l.28-p.134,l.2)

ここへきてSNの「新見解」は極まった観がある。先ず、TSはミーマーンサーの著作で、かつBrSiに対する注釈書ではない。また誤謬説を展開させた書物でもあるから、『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』と呼ばれるよりも、むしろ『ブフラマ・タットヴァサミークシャー』と呼ばれるのが、妥当であろう。さらにTSは、単に誤謬説を扱うばかりではなく、NK同様、ブラフマンや儀軌に関する議論も含んでいる。TSは、前カニカー&後カニカーという2部構成のNK同様、やはり2部構成で、前半はいわば「誤謬」論を、後半はいわば「ブラフマン&儀軌」論を扱っているもののようである。美しい仮説であり、成る程と思わぬものではないが、TSの現物を手にせず、こうしたTSの構成を知らぬ者によって、TSがいつ頃からか誤って『ブラフマ・タットヴァサミークシャー』と呼ばれるようになった、とSNは主張するのである(21)。

このSNの勇壮な想像世界が「TSが、Vācaspati没後のかなり早い時期に失われた」との推定に支えられていることは、容易に見てとれるであろう。VKの著者たるAmalānadaやPMの著者たるĀnandabodhaのみならず、NVTTに対して立派な注釈書『パリシュッディ』(Nyāyavārttikatātparyaṭikāpariśuddhi: NVTTPS)を著した大権威ウダヤナ(Udayana)でさえ、TS、ないしその内容について完全に沈黙していることは、11世紀ころの、UdayanaにとってもTSは既に未知の著作であったことの証ではないか、としている(22)。

Ⅲ. S.Sankaranarayananへの補足、むすびに代えて

前節では、SNの新見解の内実を、簡単にではあるが概観した。以下には、SNの考究からこぼれ落ちた3例について簡単に触れておきたい。一つは第Ⅰ節(ii)と(iii)のNVTTの用例である。仏教哲学徒との間で熾烈な論争を展開させたレアリストVācaspatiの面目躍如たる議論と言うべきであるが、刹那滅(kṣaṇa-bhaṅga)や空性(śūnyatā)に関して論じられている箇所である。また、(v)は、ヨーガ学派の『ヨーガスートラ注解』(Yogasūtrabhāṣya)に対する注釈書TV中

のものであるが、ダルマキールティ(Dharmakīrti)のキーワードとして夙に有名な「効果的作用性」(arthakriyā)を用いての存在論である。Vācaspatiの失われてしまったTSは、種々誤謬説や、ブラフマンを主題にしたヴェーダーンタの文章と儀軌との関わりを巡る儀軌論に加えて、仏教哲学との関わりを深く持つ、刹那滅論を扱っているもののようである。Vācaspati自身の著作に、TSに関してのさらにこうした用例のあることを知って、SNは、果たしていかなる議論を展開させるであろうか。興味尽きないものがあるが、この3例より見てとれるところを含めても、VācaspatiのTSがMaṇḍanaのBrSiに対する注釈書であることと、相容れないものは何一つ見いだされない、と考える(23)。

ミーマーンサー→ニヤーヤ・サーンキャ・ヨーガ→ヴェーダーンタというVācaspatiの3段階説、TSはミーマーンサーの著作であってBrSiの注釈書ではない、TSはVācaspatiの没後かなり早い時期に失われた、との3点よりなる、SNの合理的で魅惑的な新見解の総体は、以下に整理される諸点の観察に基づいて案出されたものと言い得るが、今後TSを問題とする際にも、つねに考慮すべきものであろう。

①BMコロホン中、TSではなしにBMに対して「ヴェーダーンタ」が用いられている。
②ヴェーダーンタ派の誤謬説(anirvacanīyakhyāti)を否定して、ミーマーンサー(バーッタ)派の誤謬説(anyathā-/viparītakhyāti)を宣揚する際に、TSが参照されている。
③TSの書名を飾ることのある「ブラフマ」は「ブフラマ」の誤記であり得る。
④Vācaspati以外によるTSに関する言及がきわめて少ない。
⑤Vācaspatiの著作中、TSだけが今日に伝わっていない。

以上で筆者のここでの作業はほぼ終了しているが、稿を結ぶに当たってなお若干の点について付言しておきたい。上記②③は、「学派の定説と個人の思想」という観点より、早急には断を下せない問題であると考える。Vācaspatiのインド思想史上の特異性とも併せ、哲人Vācaspatiの立場と思想形成にかけての今後のさらなる研究に期するところが大である。④については、先行する他者の思想・学説に関しての参照が、著作名よりは、むしろ思想家の名前、もしくはその思想家を特徴づける[学派名などの]ニックネームによってなされることが圧倒的に多

いという事実を確認しておくべきであろう。本人以外に2人も、TSの存在を裏付けていることを逆に評価すべきかも知れない。⑤は何故か？　大いなる謎である。その謎の解明は甚だしく魅惑的なものであり、今日の学者たちの関心の的ともなるものであるが、SNの新見解は、それに挑んだものではない[24]。また、単純ではあるが、①こそが、筆者にとって火急の問題点、新鮮な視点として映った。BMのコロホンのその書きぶりは、確かに、TSが「ヴェーダーンタに関する著作」ではないことを示しているように思われる。学派名と考えるべき、ニヤーヤ、サーンキャ、ヨーガの後に、「ヴェーダーンタ」と続くのであるから、NKもTSもTBももはや「ミーマーンサー」でしかあり得ない。この切実な問いかけに対しては、取りあえず次のように答えておきたい。NVTT(ニヤーヤ)もTK(サーンキャ)もTV(ヨーガ)もBM(ヴェーダーンタ)も、いずれも各々の学派の根本経典に対する注釈書(復註)に位置づけられる。一方、初期の3著作NK、TS、TBはどうか？　NKはMaṇḍanaの論著VV(ミーマーンサー)に対する注釈書であり、TBはやはりMaṇḍanaの論著SS(文法学)に対する反注釈書と言うべき独立の論著であり、その両者に挟まれたTSはMaṇḍanaのやはり論著BrSi(ヴェーダーンタ)に対する注釈書であって、いずれもミーマーンサーの根本経典『ミーマーンサースートラ』に対する注釈書(復註)などではないのである。初期の3著作は、ミーマーンサー(ダルマ・ミーマーンサー)派やヴェーダーンタ(ブラフマ・ミーマーンサー)派に深い関わりがあるとしても、インド思想史上やはり特異な思想家と言い得るMaṇḍana(広義のミーマーンサー)との関わりをこそ問題にすべきである、と[25]。

SNの今回の論文は、今日誰一人手にしていない幻の書物に関して、空想の翼をたくましくしただけの泡沫として黙殺される可能性がある。そうした途方もない想定によって、いったい如何なる新たな展望が開かれてくるのか？との陰口も聞こえてきそうである。だが、筆者はSNのここでの企てを嘉としたい。思想史を個々の思想家のディアレクティックな連なりと見なす立場よりすれば、SNが果敢に挑んでいるVācaspatiはもとより、MaṇḍanaにしてもŚaṅkaraにしても、その人生と思想の形成の様は、未だ解明されていないも同然と言うべきであろうから。(了)

略号表

BM:Bhāmati → BSuSBh

BrSi:Brahmasiddhi(S.K.SastriEd.,Delhi,1937/1984)

BSuSBh:Brahmasūtra Śāṅkarabhāṣya(A.ŚāstriEd.,Bombay,1938)

BV:Bhāvanāviveka(V.P.BhattaEd.,Delhi,1994)

MA:Mīmāṃsānukramanikā(G.JhāEd.,Varanasi,1930/1986)

NK:Nyāyakaṇikā → VV

NV:Nyāyavārttika(KSS.33,1916-17)

NVTT:Nyāyavārttikatātparyaṭikā(KSS.8,1925)

NVTTPS:Nyāyavārttikatātparyaṭikāpariśuddhi(A.ThakurEd.,NewDelhi,1996)

PM:Pramāṇamālā(ChSS.11,1907)

SS:Sphoṭasiddhi(MUSS.6,1931)

TB:Tattvabindu(AnUSS.3,1936)

TV:Tattvavaiśāradī(BSPS.46,2ndEd.,1917)

TK:Tattvakaumudī (A.S.SrinivasanEd.,Hamburg,1967)

ViV:Vibhramaviveka(L.SchmithausenEd.,Wien,1965)

VK:Vedāntakalpataru → BSuSBh

VV:Vidhiviveka(PBhS.8,1978)

註記

(1)TB,p.8,ll.4-5.

(2)SNは、註(2)の論文SNTSに先だって、"The Colophon in the *Bhāmatī*:A New Study",*ALB* 49(1985),pp.34-61や"Date of Śrī Śaṅkara —A New Perspective", *ALB* 59(1995),pp.132-176など刺激的な論文を多数発表している。筆者も前者に関しては「ヴァーチャスパティの年代論」『東洋学報』68-3•4(1987年) 356-337頁を書き、後者に関しては、平成8年度日本仏教学会学術大会(於 名古屋大学1996.10.12)で「シャンカラと仏教—シャンカラの年代論に新しい地平は開かれるのか？—」という発表(未刊)を行い、論評を試みた。その後参照するを得たSNのŚaṅkaraに関する著作*Śrī Śaṅkara:His Life, Philosophy and Relevance to Man in Modern Times*,Madras,1995の論評と併せ、別稿を期す。

(3)*ALB* 61(1997),pp.115-138.

(4)Maṇḍanaの著作として、BrSi,BV,MA,SS,ViV,VVが知られ、公刊されている。す

べて注釈書ではない独立の論書である点は注目に値する。BrSiに限定しただけでも、N.S.Anantakrishna Sastri,ed.,*Bhāvaśuddhi and Abhiprāyaprakāśikā*,Madras, 1963との重要なアーナンダプールナ(Ānandapūrṇa)とチツスカ(Citsukha)の注釈書の出版を初め、M.Biardeau,*La philosophie de Maṇḍana Miśra vue à partir de la Brahmasiddhi*, Paris, 1969、T.Vetter,*Maṇḍanamiśra's Brahmasiddhiḥ:Brahmakāṇḍaḥ...*,Wien,1969、R.Balasubramanian,*Advaita Vedānta*,Madras,1976;*A Study of the Brahmasiddhi of Maṇḍana Miśra*,Varanasi,1983 といった大部の翻訳・研究書が出版されている。さらに、A.W. Thrasher, *The Advaita Vedānta of Brahma-siddhi*, Delhi,1993は、今後のBrSiとMaṇḍana研究の新しい礎石となるものであろう。本稿とも深く関わりを持つVVは、テキスト(&NK)等の不備が叫ばれていたが、NK に対する注釈の初出版という意味もあり、E.M.Sternによる *"Vidhivivekaḥ" of Maṇḍanamiśra, with Commentary, "Nyāyakaṇikā," of Vācaspatimiśraḥ, and Supercommentaries, "Juṣadhvaṅkaraṇī" and "Svaditaṅkaraṇī," of Parameśvaraḥ,critical and annotated edition...*,[Dissertation],Pennsylvania,1988が参照出来るようになった意義は大きい。Vācaspati研究は、Vācaspatiの注釈者としての性格によるためか、論著TBの翻訳・研究を除くと、TVの全訳、BMの部分訳が公になっているくらいで、未だ不十分の観が否めない。Vācaspatiのヴェーダーンタ哲学にアプローチしたものとして、S.Suryanarayana Sastri & C.Kunhan Raja,*Bhāmatī of Vācaspati....*,ALGS.12,1933/1992とS.S.Hasurkar,*Vācaspati Miśra on Advaita Vedānta*, Mithilā,1958の2点を挙げるに留める。SNがこれら先行する諸研究の成果を踏まえているようには思われない。

(5)Vācaspatiの著作などについては、金倉圓照「哲人ヴァーチャスパティ・ミシラ」『インド哲仏研[Ⅲ]』(春秋社 昭51)261-318頁が、総覧的で詳しい。それよりも知れる通り、著作順、著作相互の関係に関しては、NVの編者Dvivedinが、かなり網羅的に言及している(NV,Bhūmikā,pp.143ff)。またTKの編者Srinivasanも、そのEinleitungでかなり詳しく論じている(TK,pp.54ff.)。Srinivasanは、成立順に関しては、BMコロホン記載の順番を必ずしも受け入れず、TS及びTBをNKよりも前に置こうとする。これを承けたものか、"Some Remarks on the Problem of the Date of Vācaspatimiśra," *JOBRS* 54(1968),pp.158-164の著者Schmithausenは、TSをVācaspatiの最初の著作と考えている(p.163,l.30)。

(6)前掲拙稿並びに前掲金倉論文を参照。

(7)註(5)、註(10)参照。

(8)sarvaṃ caitad asmābhir nyāyavārttikatatpāryaṭīkāyāṃ vyutpāditam iti ... (TK,p.84,ll.19-20)

(9)tasmāt padānāṃ sāmānyam arthas tatpratipādanāvāntaravyāpārāṇāṃ ca yathā vākyārthapratipādakatvaṃ tathā'smābhir tattvabindau nipuṇataram upapāditam/(NVTT,p.474,ll.14-16)　またNVTTには、後出(ii)以外にも、自作NKに言及している箇所がある。kṛtaprapañcaś cāyam artho nyāyakaṇikāyām iha tu vistarabhayāsaṃbhavān na prapañcita ity uparamyate /(NVTT,p.662,ll.18-19)

(10)na ca deśakālāvasthānānātve'pi vastuno rūpaṃ nānety upapāditaṃ nyāyakaṇikāyām /(TB,p.118,l.1-p.120,l.1) TBにNKへの言及があること、すなわちNKがTBに先行することが、BMコロホン中の著作リスト順が成立順との推定の有力な決め手となるように思われる。註(5)参照。

(11)補完すると、BMには、後出(v)(vi)(vii)の他に、niveditaṃ cāsmābhis tattvabindau (BM,p.284,l.10)、prapañcitaṃ caitad asmābhir nyāyakaṇikāyām(BM,p.325, l.18)などの用例もある。

(12)筆者が依拠したNVTT刊本には、"brahmatattvaparikṣāyām"とあるが、A.Thakurの新しい校訂本（NVTT, NewDelhi, 1996）の当該箇所には、"brahmatattvasamikṣāyām"とある(p.580,l.10)。なお、Thakurは、この書名部を欠く写本の存在を記している。

(13)前掲論文中、金倉先生は、BMコロホンのこの箇所に対して、「正理と数論とヨーガとヴェーダーンタに関する著述」(277頁)と訳される。鋭い解析を行い"Vācaspati's treatise on the Vedānta-s (vedāntānāṃ nibandhana)"(SNTS,p.120,ll.5-6)と訳を与えたSNであるが、結局は「ヴェーダーンタ学派」に解消してしまっている。註(14)参照。

(14)前出(viii)のAmalānandaの注釈にある通り、種々ウパニシャッド聖典を意味しての「ヴェーダーンタ」である。BMには、"vedāntamīmāṃsā-" "brahmamīmāṃsā-"などと共に"dharmamīmāṃsā-"が用いられている。詳述を避けるが、「ヴェーダーンタ」は、今日しばしば便宜的に学派名として用いられるが、注意を要する用語である。註(17)参照。

(15)SNTS,p.136,n.5.

(16)cf. *Nyāyokti-kośa* by Chhabinatha Mishra(Delhi, 1978), p.44, ll.14-17.

(17)Cf.SNTS,p.120,ll.7-11.　註(14)参照。「ヴェーダーンタに関する著作」はあり得ても「ミーマーンサーに関する著作」はあり得ない。

(18)ヴェーダーンタ学派の誤謬説、ないしVācaspati同様ミーマーンサー派の学匠ともヴェーダーンタ派の学匠とも見なされるMaṇḍanaの誤謬説の成立・展開に関しては、SN

が一切顧慮していない碩学P.HackerやSchmithausenなどによる緻密な研究史がある。今はその内実に立ち入ることを断念し、それらを踏まえているThrasherの "Schmithausen maintains that *anirvacanīya-khyāti* is Maṇḍana's own theory as a Vedāntin in the *B*[r]*S*[i], and that his prolonged defense of *anyathā-khyāti* in the *Niyoga-kāṇḍa* (*BS*,pp.136-50) is brought in purely to refute a specific argument of the Prābhākara." (Thrasher,*op.cit.*,p.32,ll.19-23)といった一節を紹介するに留める。

(19)Schmithausenは、別の刊本に依拠して(viii)とほぼ同一のサンスクリット原文を引き、"The nescience-nature of nesciences consists in their being indefinable by modes (of existence) as for instance 'existent', 'non-existent', 'both(existent and non-existent)'or 'neither (existent) nor (non-existent)' "(Schmithausen, *op.cit.*,p.160,ll.8-11)という英訳を与えている。

(20)SNはTSに関して「ブフラマ・タットヴァサミークシャー」といった呼称が、現在に伝わらなかった一因として、「ブフラマ」と「タットヴァ」による格限定複合語の尋常ならざること、即ち「ブフラマのタットヴァ」が矛盾的である[奇矯である]点を考えるが、今日のインド人学匠Subrahmanya Sastriなどの著作名*Khyātitattvasamīkṣā*にもある通り、決してあり得ないものではない、としている。また、Aufrechtのカタログの記載などに、著作名などに関して類似の誤記誤解が散見するとしている。Cf.SNTS,pp.125-126.

(21)SNの想定は、bhramatattvasamikṣā → brahmatattvasamikṣā → brahmasiddhi-vyākhyā となる。

(22)UdayanaのNVTTPSは、NVTTに対する注釈書であるが、その論述の分量に関してはNVTTに及ぶべきもない。Cf.NVTTPS,pp.115-117.

(23)BrSi の注釈の中で展開し得ない議論は、見いだせないということである。詳細は割愛せざるを得ないが、Thrasherは、Śaṅkhapāṇiによる注釈付きBrSiの刊本の編者S.Kup-puswami Sastriがその重要な英文序文の中で、あるカタログによれば、そのŚaṅkhapāṇiの注釈が "Samikṣāphakkikā" と呼称される事実を紹介し、"From this name it may be conjectured that Śaṅkhapāṇi's commentary and its close relation to the *Tattvasamīkṣā* are the chief reasons which have determined the inclusion of this commentary in this edition."(BrSi,p.lxxvi)と記したことに同調するような見解を表明している他、BrSiに対する現存する別の注釈書*Bhāvaśuddhi*の作者Ānandapūrṇaも、またTSを知っていた等の議論を詳細に展開させている。Cf.Thrasher,*op.cit.*,pp.119-120;p.154,n.33;etc.　註(4)参照。

(24)SNは、SNTSの最後を "why should this *Tattvasamīkṣā* alone disappear so

soon and so completely? Presently we have no answer."(SNTS,p.135,ll.19-20)と結んでいる。

(25)Vācaspatiは、BrSiの著者たるMaṇḍanaの同時代人ではない。したがってVācaspatiがMaṇḍanaの著作と格闘していた最初期には、Maṇḍanaのいずれの著作も参照可能な状況にあったと考えられる。VVの注釈書たるNKには自作に関する言及はないが、Maṇḍanaの著作としてBV(NK,p.43,l.13;p.73,ll.16,26;p.250,l.5;p.262,ll.23,28)、ViV(NK,p.54,l.3)、BrSi(NK,p.58,l.13;p.198,l.9;p.201,l.11)に言及がある。VV自体の中に言及されるBVについてはともかくとしても、NKを執筆中のVācaspatiの頭にあるのはミーマーンサー学派のMaṇḍanaなどではなしに、数々の著作を著して、重要なトピックに関して貴重な思索を展開させている一人の思想家としてのMaṇḍanaであったことを裏付けるものではないだろうか。註(18)参照。